山口大学教育学部研究論叢　第 68 巻　325 頁～ 334 頁　2019 年 1 月

熟議を利用した新語形成メカニズムについて
－「観察型」と「共感型」という視点－

黒﨑　貴史 *・有元　光彦 **

On the Mechanism of New Word Formation Using Deliberation
－ “Observation-Type”and“Empathy-Type” Viewpoints －

KUROSAKI Takashi*, ARIMOTO Mitsuhiko**

（Received September 28, 2018）

１．はじめに

黒﨑（2017，2018），黒﨑・有元（2018）において，「熟議」を用いた新語形成プロセスに関する研究を行った。熟議とは，「熟慮」と「議論・討議」を組み合わせた用語で，学校運営や政策等の課題解決に欠かせないツールの一つである。本稿では，熟議を「複数の参与者が，熟議課題に即した新語を形成するために熟慮・議論すること」と定義する[1]。熟議という実験方法を採用し，言語行動の観点から新語形成を捉え，その参与者がどのように新語を形成し，決定するのかといった問題ついて論じた。結果として，熟議空間で起きている事象と実社会における言語事象との類似性を指摘した。これにより，実際の言語事象を熟議という実験方法により実験的に観測することが可能であることと，まだ表出していない言語事象に対する予測性を提示することができた。

しかし，新語が形成される理論的側面については十分な議論が行えなかった。そこで，本稿では熟議において形成された新語に着目し，参与者がどのようなメカニズムに則って新語を形成しているのかを考察していく。

熟議中に形成された新語のうち，語単位のものが多くを占めている。しかし，中には文単位の新語も形成されている。これは，単なる形式上の問題ではなく，「モダリティ」の有無の問題である。つまり，新語には発話者（ここでは新語の命名者）の世界に対する認識の仕方が表れており，言語単位の問題は，命名対象の事態を発話者（命名者）がどのような視点で認知しているのかという問題を提起している。

本稿の目的は，熟議の参与者が形成した新語の語構成に着目し，どのような語彙，言語形式が選定されているのかを見ていく。そして参与者の視点という観点からどのようなメカニズムをもって新語形成を行っているのかを考察していく。

なお，以降「参与者」は熟議に参加している全員を，「発話者」は何らかの発話を発する参与者を，「命名者」は新語を提示（発話）した発話者をそれぞれ指す。これらは重複する場合がある。例えば，参与者の一人が発話をすると発話者となる。この場合，「発話した」という点に重きを置き，「発話者」と呼ぶ。また，発話者が新語を他の参与者に提示した場合，「新語を形成した」という点に重きを置き，「命名者」と呼ぶ。これらの関係を図式化したものが【図１】になる。

なお，本稿における新語は，「熟議の参与者が熟議課題となっている事態を言い表すために形成した語，あるいは，意味を変容させた語」のことを指す。仮に，既存語を新語として提示した場合，「熟議課題の内容を新たな意味としてその語に付与した」と判断し，新語とみなす。熟議空間を，「言語社会と類似した空間」と見なす筆者の考えに即すと，実験者である筆者が「新しい」と判断するのではなく，熟議の参与者が「新しい」と判断しているのかが重要となってくる。

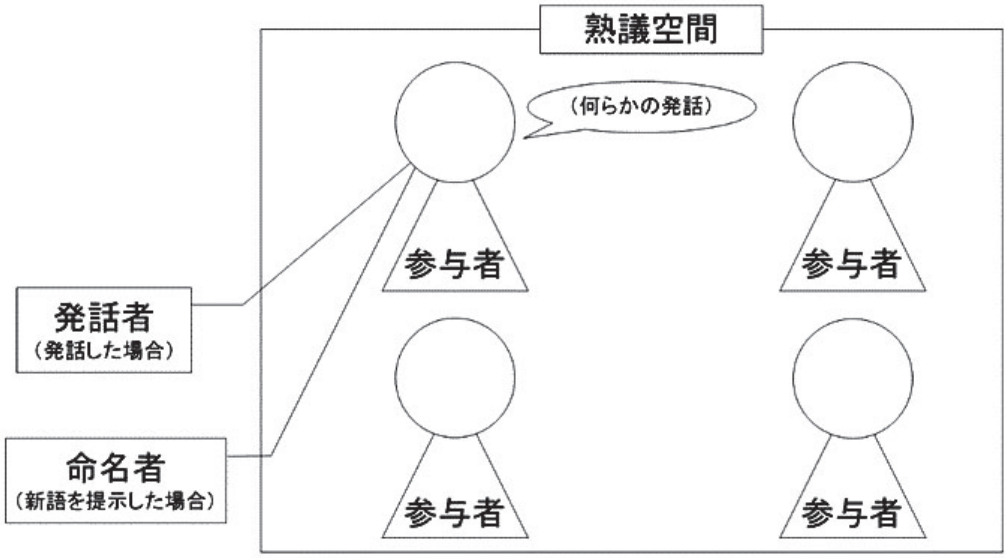
２．先行研究

新語形成のパターンを分類した先行研究は多々あるが，新語を発話者（命名者）がどのように生み出すのかといったメカニズムに注目した先行研究はほとんどない。本節では，そのわずかな先行研究について簡潔に述べておく。

*山口大学大学院東アジア研究科コラボ研究特別推進体研究員
**山口大学国際総合科学部

[1]「参与者」の定義は後述する。

【図１】「参与者」「発話者」「命名者」の定義



２．１．新語の形成理由に言及した研究

米川（1989）は，新語が形成される理由として，「社会的理由」「心理的理由」「言語的理由」「言語感覚的理由」を挙げた。社会的理由とは，その社会に新たに生まれた事物や概念を言い表すために形成したものである。心理的理由とは，ある語に対するマイナス・イメージを払拭するために別の表現に言い換えたものである。言語的理由とは，ことばのゆれや変化によって，元の語の言い換えや異形語が生まれたものである。言語感覚的理由とは，言語の規範性が緩んだり，言葉遊びの感覚によって生まれたりするものである。本稿は，言語感覚的理由と関わる研究である。

この理由は，娯楽性の強いもので，主に若者に見られるものである。若者間で「面白さ」を重要視して形成されたものと言い換えることもできる。しかし，新語における「面白さ」とは何か，という問題については不明な点が多い。様々なメカニズムによって新語形成が行われていると考えられるが，どのようなメカニズムが我々の脳内で起こり，そしてそれを選んでいるのかを解明することで，どのような新語を好むかといった問題の解明に繋がるのではないかと考える。

２．２．熟議を用いた新語形成プロセス研究

黒﨑（2017，2018），黒﨑・有元（2018）において，大学生と小学生を対象に，熟議という実験方法を用いた新語形成プロセスに関する研究を行った。新語形成プロセスとは，「熟議においてその参与者たちが新語を形成し決定するまでのプロセス」のことを指す。

黒﨑（2017）では，新語形成プロセスの解明を目指し，言語行動の観点から新語形成を行う熟議の構造を把握しようと試みた。この研究では，言語行動も独立した単位として見なし，従来の談話単位である発話（音声言語）とは区別し，言語行動に着目した「表態」という単位を設けている。これは，「主体者の認識や意思が表出されている音声言語と行動の一まとまりのこと。他の人物の音声言語や行動が新たに現れることで区切られるもの」と定義する。つまり，従来の談話単位である発話に加え，新語に対する反応や，新語を形成しようと思索している状態と判断できる表情や動きも独立した単位とみなす。また，この表態の一まとまりである「新語形成フェーズ」という単位も設けた。これは，従来の話題で区切る「話段」とは区別し，新語の最終的な決定までに経ている段階的な作業工程の集合である。

この研究では，熟議（新語形成談話）は，「認知」「枠組み」「提案」「審議」「脱線」という5つの新語形成フェーズによって構成されていることが判明した。これらは，言語行動の観点から設けた単位である。これらを行き来して我々は新語を形成している。

黒﨑（2018）では，世代によってこの新語形成フェーズの現れ方に差異があることを指摘した。大学生は「認知→枠組み」というプロセスを経た後，「提案→審議」というプロセスを経ている。これは，十分な議論を行って新語を提示しなければ熟議が上手く進まない可能性があるため，それを防ぐためだと考えられる。これに対し，小学生は「提案→審議」というプロセスが，熟議の初めから終わりまで現れている。これは，自分の意見を優先するという小学生の心理が関係していると考えられる。

黒﨑・有元（2018）では，熟議における廃語がどのように起こるのかという問題について論じた。その結果，「借用（外国語への変換による新語の消去）」「陳腐化（「なんとなく」などの感覚的な理由による新語の消去）」「語の転倒（ある新語の構成要素を入れ替え新た

な新語を形成することで，元の新語を消去すること）」というパターンを導き出すことができた。

また，これらの廃語が起きる理由が，井上（1995）や高野（2002）の指摘した実社会における廃語理由と対応していることも判明した。井上（1995）は，廃語理由をいくつか挙げ，その分類を試みている。その中で，外来語の介入により，これまで使用していた和語や漢語が消失する「借用」，若者ことばや流行語に対する面白さが薄くなることで，そのことばが消失する「陳腐化」を指摘している。また，高野（2002）は，『明六雑誌』（1874～1875）に掲載された二字漢語を対象に，いくつかの廃語理由を挙げた。その中で，「抵抗」と「抗抵」のように，文字が転倒し，それらが競合することでどちらかが消失する「語の競合」を指摘した。

「借用」や「陳腐化」，「語の競合」は，黒﨑・有元（2018）で指摘した，熟議空間における廃語理由と対応している。これにより，熟議という実験方法によって，新語形成プロセスを実際の言語社会と熟議空間との間で比較することが可能であるといえる。さらに，現段階では言語社会で観察できていない言語事象も観察できるという予測性を提示した。

以上の先行研究は，いずれも命名者による新語形成メカニズムに注目したものではあるが，単なる分類に終わっている感が否めない。そこで，従来の研究から得られた言語データを再分析することによって，新語形成メカニズムの仕組みの理論的構築を目指す。

3．実験方法

本稿では，黒﨑（2017）の方法論と言語データを用い，命名者がどのようなメカニズムによって新語を形成しているのかという問題について分析していく。言語実験の方法は，以下の通りである。

本稿で扱う言語データは，黒﨑（2017）で用いたA-3のものを用いる。この記号（A-3）は，本稿で用いるグループ名である。参与者の特徴は下記の通りである。

A-3（大学生）：A（18歳・女性），B（18歳・女性），C（18歳・女性），D（18歳・女性）

言語実験の手順としては，まず上記のグループに熟議課題を与え，次にグループでの熟議を通して，その課題に相応しい新語を作ってもらう。熟議課題は，「“前から歩いてくる人にぶつかりそうになって左右によけたらまたぶつかりそうになる現象”に名前をつける」というものである。

グループ分けの際には，熟議を円滑に行えるよう，親交のある人物どうしになるようにした。参与者はそれぞれA，B，C，Dのアルファベットで表記している。参与者の性別や出身地などの属性も，新語形成に影響を与えると考えられるが，現段階では考慮していない。

熟議の時間は30分間で，その間に新語が決まらない場合は延長し，決まるまで熟議を行った。

4．分析

本節では，言語データを示しつつ，新語形成メカニズムを理論的に解明する。その際，命名者の「視点」という概念を導入する。ここで言う視点とは，新語を形成する命名者の命名対象に対する認知の仕方をいう。命名対象を言い表すにふさわしい新語を形成する際，様々な観点から命名対象を観察すると考えられる。命名者が，どのような観察地点から何を観察して新語を形成しているのかを分析していく。

本節では，【表１】のような収集した言語データを示しながら，新語形成における視点について述べる。

【表１】では，左から「新語形成フェーズ」「表態」「言語行動」「中心となっている新語」の４つの項目に分けている。「中心となっている新語」とは，話題の中心となっている新語のことを指す。また，「新語形成フェーズ」が表れている部分，新語形成に関わる言語行動と思われる部分，提示された新語が話題となっている部分については，網掛けで表している。

また，表態の項目には発話された言語データを記載しているが，左側の６桁の数字のうち，最初の２桁は言語実験番号である。次の４桁は発話の通し番号である。その次にあるアルファベットは発話者（参与者）の記号である。言語データの中でカギカッコ付きの太字になっているものが，形成された新語である。

【表１】言語データの提示サンプル

新語形成フェーズ	表態	言語行動	中心となっている新語
	040001K:はい。今日はありがとうございます。実験に協力いただきまして。 040002B:はい。		
	（中略）		
提案	040110C:「**逆以心伝心**」じゃね？	概括	逆以心伝心
審議	040111D:(笑う。) 040112A:逆…。(笑う。) 040113D:以心伝心…。 040114AB:うーん。		
		拒否	

その他，言語データ中の表記については下記の通りである。

／・・・・同時発話の出現箇所。重ねられた箇所にスラッシュを入れ，その下の同じ場所にさらにスラッシュを入れ，重ねた側の発話を記載している。
（　）・・笑いなどの非言語的要素を示す。
？・・・・語末や文末におけるイントネーションの上昇。
［　］・・筆者による補足。

４．１．新語形成における２つの視点

本節では，熟議において参与者がどのような視点で新語を形成しているのか，そのメカニズムについて述べる。ここでは，便宜上，大きく「観察型」「共感型」に分けて記述する。

４．１．１．観察型

参与者は，熟議中に様々な新語を形成する。それらには，参与者の視点が表れている。その一つに，命名対象となる事態を第三者的視点に立って名づけたものがある。【表２】を見られたい。

【表２】「鏡現象」の形成

枠組み	040115C:あ、それか鏡とか。 040116ABD:あー。 040117A:(笑う。)うまーい。(笑う。)
提案	040118B:**「鏡現象」**。
審議	040119C:**「鏡現象」**。 040120D:鏡…。 040121C:あ、面白そう。

比喩	
	鏡現象
賛成	

【表２】では，040118Bで「鏡現象」という新語が形成されている。これは，「行為者」の動作を第三者的に観察し，それに基づいて形成されたものである。ここで言う行為者とは，熟議課題の事態を体験している者のことを指す。これは，参与者が自身の体験に基づいて想像で頭の中に作り上げた存在である。この新語は，「２人の行為者が同じ方向に避ける」という熟議課題の要素から，鏡という比喩を用いて形成したものである。つまり，事態の行為者である２人を離れたところから観察し，その特徴から「鏡」というキーワードを捻出し形成している。この「鏡」というキーワードから，「ミラー現象」，「ミスターミラー現象」，「ミセスミラー現象」，「歩道ミラー現象」，「歩道上ミラー現象」，「道上ミラー現象」，「道端上ミラー現象」「一本道ミラー現象」という派生形も形成されている。これらの新語では，和語から外来語への語彙的な変化が起きているが，それが示す意味内容は変化していない。そのため，これらも鏡現象と同様のメカニズムによって形成されたものとする。

別の例も挙げる。【表３】を見られたい。【表３】における040110Cの「逆以心伝心」は，「行為者が同じ方向に避ける」という要素から，「以心伝心」というキーワードを捻出し名づけたものである。しかし，「以心伝心」のままでは不十分であると参与者は考えている。例えば，行為者が互いに「右に避ける」と考えていた場合，向かい合った両者はスムーズに避けることができる。そのため，事態の内容を的確に示そうと「以心伝心」に「逆」という接頭辞を付けた。これも，命名者は行為者の動作を脳内で想像，観察し，その動作からキーワードを捻出して相応しい語彙を選択している。

【表３】「逆以心伝心」の形成

枠組み	040103D:なんで？／通じ合っとる。 040104C:　　／相手と、そう。以心伝心しちゃったよ、みたいな。 040105D:でも以心伝心したらこう 040106C:あぁ、逆に。 040107D:逆に上手くいく。(笑う。) 040108A:あぁそうか。(笑う。) 040109B:(笑う。)
提案	040110C:**「逆以心伝心」**じゃね？

概括	逆以心伝心

以上より，命名対象である事態を第三者の視点から観察し，それを表すキーワードとなる語彙を選択して名づけるというメカニズムを設定できる。この視点を「観察型」と呼ぶこととする。

さて，この観察型には２つの異なる性質のものがあると考えられる。前述の「鏡現象」と「逆以心伝心」を例

に説明する。前者は，事態に関わる行為者の動作を表面的に捉え名づけたものである。それに対し，後者は，行為者の動作から行為者の「こちらに避けよう」という心理的な面を類推して名づけたものである。

このように，事態を表す新語の命名において，観察型という視点を用いたメカニズムには，その事態の「表面的」なものを表現したり，あるいは，その行為者の「心理的」なものを類推して表現したりするものがある。これは，命名者の観察地点と事態との間に距離があることを示している。表面的なものの場合，命名者は行為者から最も離れているが，命名者が心理的要素を類推するほど，命名者と行為者の距離は縮まる。つまり，客観描写から主観描写に近づく。

以上の考えは，久野（1978）の「共感度」という概念を想起させる。共感度とは，話し手が文中のどの人物の視点に立っているかという点を問題とし，次のように定義されている（cf. 久野1978:134）。

> 共感度：文中の名詞句のx指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感（Empathy）と呼び、その度合、即ち共感度をE（x）で表す。共感度は、値0（客観描写）から値1（完全な同一視化）迄の連続体である。

久野の共感度で表すと，表面的な観察型は［E（x）=0］で，心理的な観察型は［0<E（x）<1］でそれぞれ表すことができる。この場合，観察地点を0，行為者のいる地点を1とする。心理的なものが1と同一にならないのは，あくまで動作の表面的なものから心理を類推しているためである。そのため，行為者に近づくことはあっても，同一化は起きないものとする。

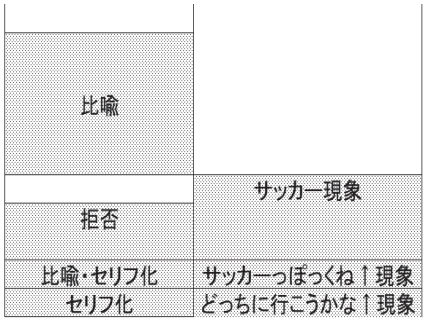
しかし，久野（1978）は実際の談話における話し手の共感に主眼を置き，それがもたらす構文規則を検証したものである。それに対し，本稿では命名者が頭の中に想定する行為者への共感に主眼を置いているため，同一の概念や理論的枠組みを仮定しているわけではない。

4．1．2．共感型

一方，新語の中には行為者と同一化してしまったものもある。【表4】を見られたい。

【表4】「サッカーっぽくね↑現象」「どっちに行こうかな↑現象」の形成

認知	040476A:（両手の人差し指を体の前に出して左右に動かす。）
	040477C:サッカーっぽくね？
	040478B:サッ…
	040479D:うん。
	040480B:カー。
	040481D:うーん。
審議	040482B:「サッカー現象」？
	040483A:サッカー。うーん。（首を傾げる。）
	040484D:うーん。
提案	040485B:「サッカーっぽくね↑現象」。
提案	040486C:可愛くするなら、「どっちに行こうかな↑現象」だけど。



【表4】を見ると，行為者の動作をサッカーのプレイに例えて新語を形成している。040485Bで「サッカーぽくね↑現象」を，040486Cで「どっちに行こうかな↑現象」という新語が形成されており，上昇イントネーション（記号↑で表している）の終助詞「ね」と「な」が使用されている。いずれも，疑問の意味を表すモダリティである。終助詞「ね」は聞き手への語りかけとして，「な」はそれに加え，話し手の独り言としても使用できる[2]。

モダリティは，話し手の世界に対する主観的認知が反映された言語形式である（cf 森山 2000，森山・仁田・工藤 2000）。本稿の場合，モダリティの表出は，命名者が視点を行為者と同一化させることで事態を認知し，新語を形成しているという仮説を提示することができる。観察型は行為者に近づくことはできるものの，あくまでも客観描写であるため視点が行為者と同一化することはない。しかし，モダリティのある新語は，命名者が自身の経験あるいは想像に基づいて，「自分が行為者ならば何と発話するか」を考えて形成されたものであると判断できる。

【表4】で示した例は，この同一化と同等であると考える。【表4】で形成された新語のようにモダリティがあるものは，命名者が行為者に成りきって形成したものであり，他者の感情や態度を主観的描写によって提示し

[2]田窪・金水（1996）では，「『ね』が必ず聞き手に対する語り掛けの場面で用いられるのに対し、『な』は語り掛けにも独り言にも使える」という使用上の違いを指摘している。しかし，この使用上の違いを除けば，「当該の命題の妥当性を計算中であるという標識」という点で，両者は同機能だと述べている。

た例である。行為者に対する共感によって形成されたと言ってもよいだろう。そのため，この命名者と行為者の視点が同一化する例を「共感型」と呼ぶことにする。共感度で示すと，［E（x）=1］となる。

また，終助詞以外の言語形式を用いた共感型によって形成された新語がある。【表５】を見られたい。

【表５】「ごめんね現象」の形成理由

認知	040158D:ものすごく申し訳ない気分になる。		
	040159B:それ。		
	040160D:(笑う。)		
	040161C:あ。相手に？		
	040162D:そう。		
	（中略）		
	040610B:私自転車乗っとって、ぶつかりそうになって		
	040611C:うん。		
	040612B:一回足着いたことあるよ。		
	040613C:あ一着く！		
	040614A:あ一それもある。		
	040615B:うん。おばあさんとなって、あーごめんなさいって言われた。		
	040616C:言う。(低い声で)どうぞーって。		
	040617A:(笑いながら)恐い恐い。		
認知	040618B:(笑う。)		
	（中略）		
提案	041245A:「ごめんね現象」。	セリフ化	ごめんね現象
審議	041246B:うーん。	拒否	
提案	041247C:「ごめんなさいね現象」の方がちょっと嫌味があって面白い。	セリフ化	ごめんなさいね現象

ここでは「ごめんね現象」という新語を形成している。これは，感動詞「ごめん（なさい）」を用いて形成された新語である。この新語の形成理由として，事態の行為者に自分がなると「申し訳ない気分にな」ったり，実際に「ごめんなさい」と言われたことがあるからだと参与者は述べている。このような感動詞を用いた新語形成も，共感，つまり同一視点に立って行為者の感情を言語化したものと判断する。この事態には２人の行為者がいるが，そのどちらの視点で形成したのかの判断は難しい。むしろ，そのどちらの視点にも立つことができる，というのが妥当であるのかもしれない。

以上，熟議において新語を形成する際，「観察型」と「共感型」という２つの視点を持っていると仮定し，これらを用いて新語形成を行っていることを記述した。これらの視点について簡潔に記述すると，下記のようになる。

観察型：命名対象の事態を第三者的視点から捉え，事態の特徴に基づいて名づけたもの。行為者に近づくことはできるが，視点の同一化はできない。

共感型：命名対象の事態における行為者と同一の視点に立ち名づけたもの。行為者になりきり，モダリティや感動詞など，聞き手を意識した命名者の話し手的態度が反映されている。

４．２．新語形成メカニズム

熟議において，前節で仮定した「観察型（表面的）」，「観察型（心理的）」，「共感型」という視点をどのように用いて新語を形成しているのか。本節では，そのメカニズムについて記述を行う。

前節では，新語を形成する際，上述の２つの視点を持っていると仮定し，これによって新語を形成していると考えた。また，視点によって，命名対象と命名者の観察地点との距離が変化することについても述べた。この距離の問題を図式化したものが【図２】になる。

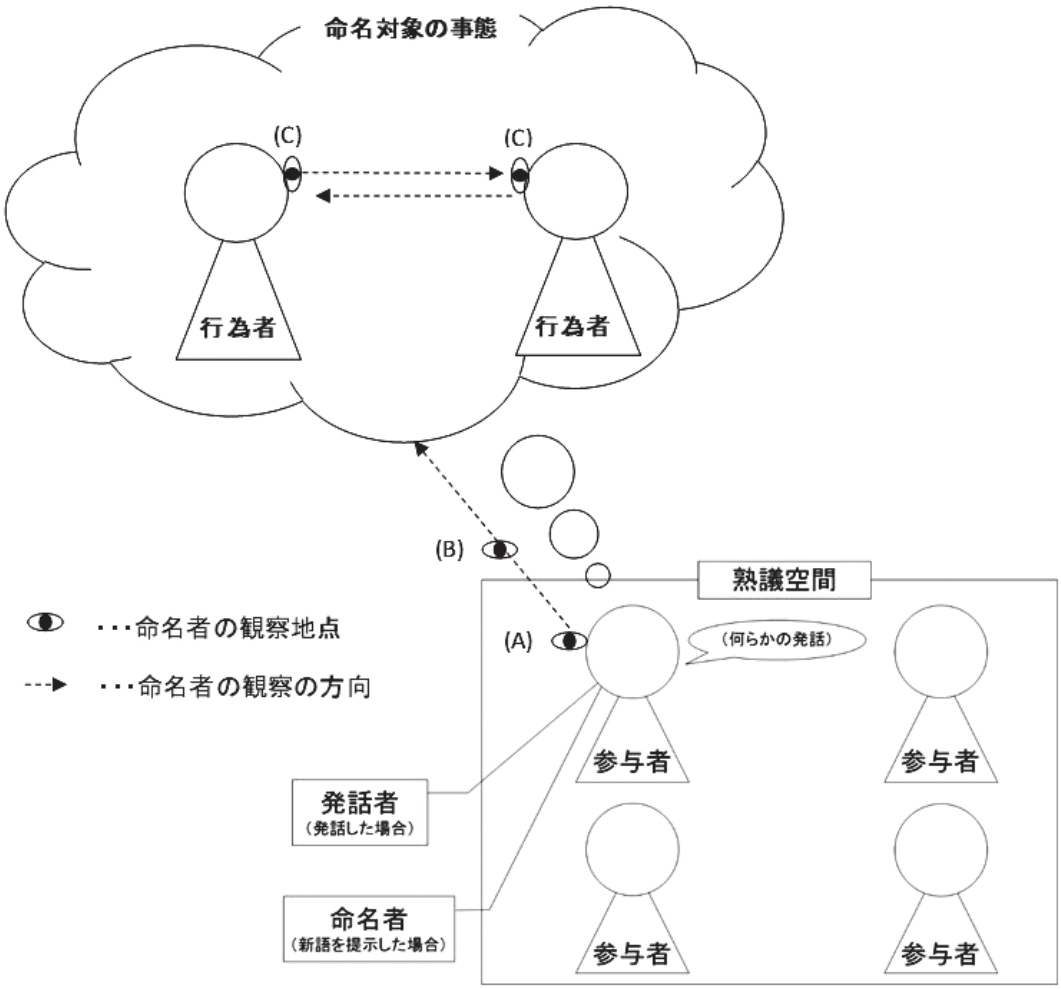
【図２】の（A）（B）（C）は，新語形成時における命名者の視点を示している。（A）は，観察型（表面的）を表しており，命名対象の事態から最も遠い位置から事態を観察し，新語を形成する。（B）は観察型（心理的）を表している。（A）と同様，事態から離れた位置で観察しているが，行為者の動作や様子から感情を類推するものであり，その視点は（A）よりも行為者や事態に近い。

これらに対し，（C）は行為者と同一の視点で事態を観察する共感型である。観察型は，客観的に事態を観察するが，共感型は行為者に成りきっており，主観描写による新語を形成する[3]。

以上より，参与者は，だれでもこれらの視点を持っており，新語を形成する際にいずれかの視点を利用すると言える。新語を形成する際，いずれかの視点が常に選ばれている。しかし，一方の視点に必ず固定されるということはない。我々は，その視点を自由に変化させることができる。そのため，多種多様な新語を形成することが可能になる。また，視点の変化にあたって，その選択は無意識に行われる。熟議の内容を見ても，視点の変化を意識したような発話を確認することはできなかった。

[3]「主観性」「客観性」「間主観性」との関連も考えられるが，今後の課題とする。

【図２】熟議における新語形成メカニズム



４．３．言語データ分析

本言語データに現れたすべての新語を，視点によって分類したのが【表６】である。

左から「観察型（表面的）」，「観察型（心理的）」，「共感型」の項目に分けている。それぞれの新語の語彙的側面に着目し，どの視点によって形成されたのかを判断している。これらの新語は，表の上から下に向かって熟議で形成された順番通りに記載している。また，網掛けになっている「ディフェンス現象」が最終的に選ばれた新語である。下部の矢印は，命名対象と命名者との距離を表しており，右に行くほど命名者の視点が行為者に近づいていることを示している。

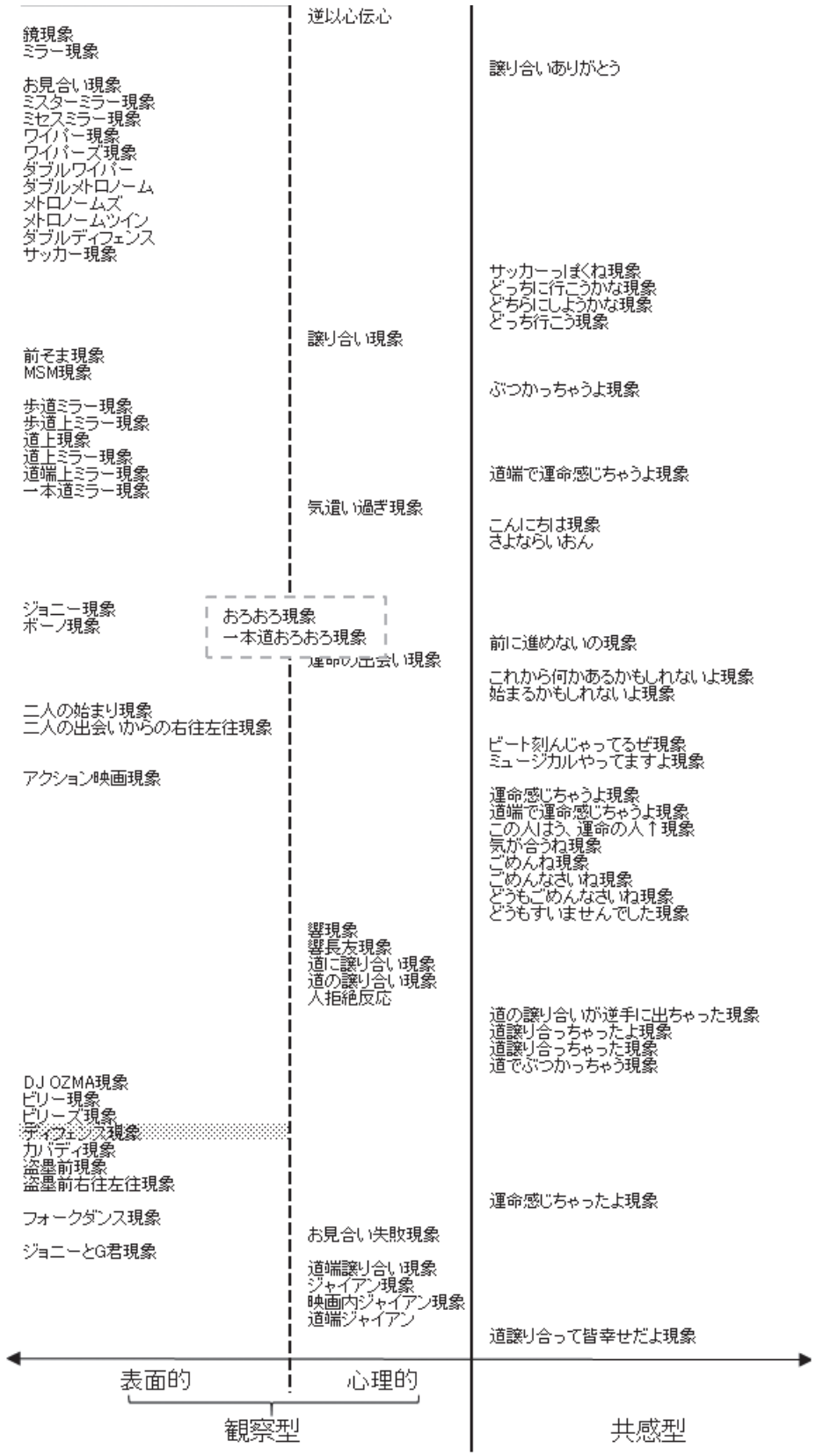
新語の中で，「おろおろ現象」と「一本道おろおろ現象」の位置については問題が残る。これらの新語は行為者の動作（左右に揺れる動作）から命名されたものである。そのため，分類としては観察型（表面的）に相当すると考えられる。しかし，「おろおろ」というオノマトペには「驚き」や「慌てる」という感情が含まれており，行為者の心理を類推している。従って，オノマトペは，動作と心理との関連性を持った語であるため，観察型（表面的）と観察型（心理的）の中間に位置付けている。

【表６】を見ると，上の方には観察型（表面的）の新語が多い。「サッカー現象」という新語を形成した後，「サッカー」という語を残し，「サッカーぽくね↑現象」という新語を形成している。その後，共感型による新語が増える。また，観察型（心理的）も，表の下の方に集まっている。

このことから，「観察型（表面的）による新語形成が熟議の最初で行われやすく，その後に行為者の感情に関わる新語形成が行われる」という仮説を立てることができる。熟議を進行することで，参与者は事態がどういうものかという問題についてより熟慮を行う。そして，まずは表面的な観察が行われ，次第にその行為者へと意識が向かい，徐々に視点が同一化していく。

上に立てた仮説を言い換えるならば，観察型（心理的）や共感型といった，行為者の感情に関わる視点は熟議を進行させなければ得ることができない，ともいえる。熟議の最初に観察型（表面的）による新語形成が多く行われていること，最終的に参与者が選んだ新語がこの視点によるものであることから，観察型（表面的）を用いた新語形成は好まれやすいと考えられる。このことから，

【表６】命名者の視点と新語との対応表



命名者は，熟議に限らず実社会においても，この視点を新語形成メカニズムの基本形として選ぶのではないだろうか。

どの視点が選ばれやすいか，という問題は新語の好みという問題にも繋がると考える。米川（1989）では新語が形成される理由の１つとして「言語感覚的理由」を挙げている。これは，面白さを意識して生まれたものと言及されているが，「面白さ」とは何か，どんな新語が好まれやすいのかといった具体的な問題については不明な点が多い。本稿のように，視点という観点から新語形

成メカニズムを仮定することで，新語形成の方法として最も選びやすいメカニズムが解明でき，どのような新語が好まれるのかという問題の解明にも繋がるのではないだろうか。

5．まとめ

熟議で形成された新語には，語単位のものと文単位のもの（モダリティ）が存在した。このような言語単位の問題は，命名者が命名対象である事態をどのような視点で認知しているのかといった問題を提起している。この言語単位の違い，主にモダリティの有無に着目し，新語を形成する際の命名者の視点を２つに分類した。

１つは観察型である。これによって形成された新語は，事態の特徴やその行為者の動作などからキーワードを導き出して形成されたものである。もう１つは共感型である。これによって形成された新語は，命名者と事態の行為者の視点が同一であるため，モダリティや感動詞といった主観的な言語形式で表される。そして，熟議によって新語を形成する際には，命名者は観察型と共感型の２つの視点のいずれかを常に選択する，というメカニズムを仮定することができた。

さらに，観察型には行為者の動作そのものなど，事態の特徴を言い表した表面的なものと，動作や様子から行為者の感情を類推した心理的なものに分けることができた。共感度で表したものが下記になる。

・観察型（表面的）：　E（x）=0
・観察型（心理的）：　0<E（x）<1
・共感型：　E（x）=1

これは，命名者と命名対象との距離を表している。例えば，観察型（表面的）は，命名対象の事態に対して部外者としての視点で捉えているため，距離は最も遠い。これに対し，共感型は，事態の行為者と視点が同一化しているため，距離は最も近い。行為者の動作から行為者の感情を類推する観察型（心理的）は，その中間にあると言える。つまり，「観察型（表面的）→観察型（心理的）→共感型」の順で，命名者と行為者との視点が同一化にどんどん近づいていくことを示す。

新語形成メカニズムにおいて，これらの視点は強い独立性を持ったものではなく，連続性を持ったものである。つまり，参与者は特定の視点による新語形成に縛られることなく，自由に，そして無意識に視点を選定して新語形成を行っている。

観察型と共感型という視点は，熟議という特性によって設定できたものと考えられる。複数人で話し合った場合，他人の意見を聞くことで一人では思いつかないアイデアが生まれる。また，意見を合致させようとすることで，命名対象を様々な観点から考察し，多くの語彙を選択できる。恐らく，アンケート調査のような個人で考えさせる調査方法では，観察できない問題だろう。熟議という調査方法を用いることで，多様な新語形成メカニズムを観察することができる，という方法論の有効性についても付言しておく。

しかし，多くの課題も残っている。まず，今回は１つのデータしか扱っていないため，十分な議論が行えたとは言えない。今後，より多くのデータで検証する必要がある。また，命名対象が変わることで，視点やメカニズムも変わると考えられる。本稿では，行為に関わる熟議課題で熟議を行ったが，物や自然現象など，熟議課題の内容を変えて調査を行うことで，本稿で立てた仮説のより綿密な検証を行うことができる。

視点の問題については，現在収集しているデータによっては共感型が見られないものもある。新語形成においては，共感型という視点は必要なものではないかもしれない。しかし，「現れない」という点が重要であるように思われる。「熟議＝実社会の縮図」と捉え，新語と人間，新語と社会の関わりの中で新語形成を見ようとする本稿において，視点の差異は参与者の属性の差であると考える。そのため，なぜ現れても現れなくてもよい視点があるのかといった問題を考える必要もあるだろう。これにより，社会言語学的な観点から，新語形成メカニズムの解明を進めることができる。さらに，今回確認できなかった視点を見ることができるかもしれない。

また，社会言語学の問題として，方言との関連も挙げられる。小学生のデータでは，方言を用いた文レベルの新語が表れている（cf. 黒﨑 2018）。例えば，「ヨケレン」という新語がある。これは，山口方言の動詞「ヨケル（避ける）」の未然形に可能の意味を表す助動詞「れん」を付属させたものである。このように新語形成には方言が用いられることがかなりあるため，方言形は言うまでもなく，言語行動の方言差にまで注目すべきである（cf. 篠崎 2016）。

次に，新語の分類表の再検討も行うべきだろう。４．３．で述べたが，オノマトペの位置については問題が残った。また，オノマトペ以外にも位置づけが困難な新語が出てくる可能性は十分考えられる。今後，命名者の視点と新語形成との関連を解明していく上で，この問題は慎重に扱う必要がある。

次に，命名者はどちらの視点を選びやすいのか，という問題については，取り上げたデータが少ないため，他のデータとの比較が必要である。現段階では確定的なことは言えないが，本言語データを見ると観察型が多く，最終決定された新語も観察型（表面的）であるため，こ

の視点が好まれるのではないかという仮説を立てることができる。また，熟議の通時的な問題との関連も考えられる。4．3．で示したように，観察型（表面的）が多く，熟議が進行するにつれ観察型（心理的）や共感型といった，行為者の感情に関する新語が増えている。このことから，行為者への共感は瞬時に行えるものではなく，熟議時間の経過とともに次第に生まれてくるものではないかという仮説も立てることができる。どの仮説も，本言語データのみで立てたものであるため，今後より多くのデータとの比較・検討を重ね議論していく。

どの視点が好まれやすいか，という問題は新語の好みという問題にも繋がる。面白さという言語感覚的理由とは何か，どんな新語が好まれやすいのかといった具体的な問題については不明な点が多い。本稿ではこの問題に対して十分な言及はできなかったが，本稿で提示したメカニズムの解明が，この問題の解決に寄与できるのではないだろうか。

参考文献

井上史雄（1998）「ことばはなぜ消えるか―廃語と近代化」『月刊言語』第9号　大修館書店　pp.35-44
久野暲（1978）『談話の文法』　大修館書店
黒﨑貴史（2017）「言語行動から見る新語形成プロセスについて―熟議を利用して―」『東アジア研究』15号　pp.51-70　山口大学大学院東アジア研究科
黒﨑貴史（2018）「熟議を利用した新語形成プロセスに関する研究」山口大学大学院東アジア研究科博士論文
黒﨑貴史・有元光彦（2018）「熟議空間における廃語プロセス」『山口大学教育学部研究論叢』第2部 67巻　pp.253-260　山口大学教育学部
篠崎晃一（2016）「方言と行動」『はじめて学ぶ方言学　ことばの多様性をとらえる28章』ミネルヴァ書房　pp.244-252
高野繁男（2002）「『明六雑誌』の語彙構造―2字漢字を中心に（その2）―」『人文学研究所報』神奈川大学　pp.47-57
田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3巻 3号　日本認知科学会　pp.59-74
森山卓郎（2000）『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房
森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（2000）『日本語の文法3　モダリティ』岩波書店
米川明彦（1989）『新語と流行語』南雲堂